

五年

十月二十八日二、三校時

詩と俳句を味わおう (東書)

第一次第二次指導混合で (1/2)

○ 本時の目標

- ・ 詩と俳句の特徴を知り、詩「水のころ」を味わいながら暗唱できる。

〈区画〉

- 1 九十ページ 一行目 水の
- 2 九十二ページ 一行目 山の
- 3 九十三ページ 一行目 俳句
- 一 よむ (音読 三区画 三人)
- 二 とく (読後感の話し合い)

〈題目〉

- 詩と俳句を味わおうという話ですが、「味わおう」の「おう」を取ると、前は、どうなる。
味わう。
- では、「おう」はどういうとき使うの。
これからやるとき。
- これからやるとき。自分が。
みんなに向かって。
- あつ、そう。みんなに呼びかけている
ときに使えんだね。呼びかけのときの
「おう」なんですね。

○ 誰が、誰に呼びかけたの。

自分がみんなに。

○ このお話だったら、「詩と俳句を味わおう」って呼びかけたのは誰。
作者。

書いた人。

○ この本を書いた人。作った人が、誰に呼びかけているの。
小学生。

○ うん。今、この本を読んでいる君達に呼びかけている。

○ 「味わう」というのは、普通どういうときにするの。
食べるとき。

○ そうすると、これは「食べよう」ということだな。でも、これおかしいな。俳句を食べるとはいわないね。そうすると、俳句をどうしてもらいたいの。
感じてもらいたい。

読んでください。

○ 読んでください。読んでくださいだけでなく、味わうだから、こうしてくださいと書いてある。
覚えて。(覚えよう 板書)

○ 覚えようですけれども、俳句の何を味わいながら覚えればいいのかな。俳句のところをさがして。
季語。

○ 季語。季語もですが、他に。

表現の工夫。

○ 表現の工夫を味わおう、覚えようという事です。

○ 俳句の表現の工夫を味わおうです。俳句というのは、簡単にいうとどういいうのですか。
五・七・五。

○ もっと簡単に一言でいうと。五・七・五は、一言じゃないよ。もっと簡単に。この中に出ている。(板書を指して) 詩。

○ 詩だよ。俳句も詩です。俳句は、特別な約束があるでしょう。
五・七・五。

○ 五・七・五という十七音で作るのね。
(五・七・五 板書)

○ その他に、まだ約束があったでしょう、何。
季語。

○ 季語を入れるという約束。そういう風
にいろんな決まりがあるのを定型詩
っていうんですけれども。(季語 板書)

○ 俳句は、世界で短い方の定型詩です。
○ それでは、「山のあなた」をちよつと見てごらん。そして、一番最初の行の「山のあなた」のところを数えてごらん。
十二音。

○ 十二だね。そこを上手く数えてごらん。
こっちの方(俳句)の何かを使ってないか。

五・七・五の七・五。

○ 七と五になっているでしょう。君達は、「われは草なり」を勉強したでしょう。はい。

○ あのとときにも、これ使ってなかった、七・五。

ああ。

○ それ、七・五調って習ったでしょう。(七・五調 板書) 調というのは、調べ、リズムを作るの。どうも、これ七・五調で書かれている。

○ それにこの詩、なんか読みにくかったです。どうして、日本語なのに読みにくいのか。

昔の…。

○ 昔の言葉。それをこういう言葉で習ってなかったかな。(文語 板書) 文語という。日本語なんだけど、これね、今から千年位前に使われていた言葉をずうつと書くのに使ってきた。普段、私たちが使う言葉を何っていかという、文語に対して(口語 板書) 口語っていいです。日本語で書くとき音の響きがいいんです。日本では昔からね、使ってきた。俳句のもとになった歌なんですけどね。何ということ分かるかな。

○ 短歌というの。短歌をつなげて連歌というので遊んでいた。

○ 最初の「水のこころ」というところ、開

けてごらん。違うところがあるでしょう。

○ いくつに分かれている。

二つ。
三つ。

○ 三つに分かれている。三連の詩なんです。これが、この詩の特徴。

(1、2、3と板書)

○ 一連目と二連目似てない。何が似てる。

最初に、「水はつかめません」と書いてあります。(いいながら板書)

○ どうも、これは繰り返しが使われている。一連目と二連目は、ほとんど…。そっくりだね。形がそっくりでしょう。これがね、詩を作るとき工夫なんです。

○ さあ、「水」といったらどんなことを連想しますか。

流れる。

透明。

冷たい。

○ 水といたら「流れるとか冷たい」といってくれた。それが大事。水というのは姿かたちは決まっているか。

決まってる。

○ どうやったら決まるの。

周りの形。

○ あつ、周りの形。入れ物によって変わるんだな。そうすると、水はうまく掴むことはできるのか。

いやあ…。

○ うまく掴むことができないんだな。そうすると、形は自由になっちゃう。

○ でも、目で見るとは…。

できる。

○ 触ることも…。

できる。

○ では、心は見ることもできる。

見えない。

○ 触ることできる。

できない。

○ できないけれども、あることは…。

ある。

○ わああ(笑い声に)。あることは分かるんだな。その心っていうのは、これ(水を指し)と似ているところがあるんだよ。

○ 何が似ているかという、心には、姿かたちは…。

ない。

○ ないんだな。決まってるないんだな。でも、お母さんがこうなった(角を出す格好)ときと、こうなった(笑顔)ときとは、君達の心は、変わるでしょう。心は、自由になる。その、自由になるもの同士をくっつけた詩です。

(手引き)

○ 水の心という題なんですけど、本当は何のことを言いたかったんだろう。これを考えるのがこの詩の面白いところ。本当は、何のことを考えたかったのか。予

想。

水のこころ。

○ 水の心のことを考えたかったのか。水の心のことを考えて、何のことに気がついたんだ。

人のこころ。

○ 人の心にながったというの、この詩のようだな。そこを調べていきたいと思いたすので、「水のこころ」という詩を全部書いてください。

三 よむ (指示に沿って黙読)

四 かく (視写)

五 よむ (板書を音読 一名)

六 とく (板書を活用した話し合い)

〔語義・区分〕

○ さあ、難しい言葉ありますか。ありません。

○ じゃあ、この違いを考えてください。「つかめません」の「つかむ」ってどういうこと。「すくう」ってどういうこと。「つむ」ってどういうこと。みんな何でやること。

手。

○ みんな、手でやるな。「つかむ」をして見せて。(つかむ格好をする)

○ では、「すくう」は…。(格好をする)

○ 「つむ」(格好をする)

○ ああ、こうもあるな。(動作に反応して) ああ、よしよし。みんな違いがある

ね。そうすると、一番荒っぽいのはどれ。

(子、つかむ動作をする)

○ そうだね。これ(板書を指し)だね。その感じがつかめていけばいいよ。

○ 後は…。ここに「そおつ」とあるけれども、普通、「お」を「う」と書くでしょう。これ、歴史的仮名遣いというわけではなくて、この高田さんの特別な使い方かもしれない。高田さんはこういう風にかきたかったんだね。約束事なんですけれども、こう書いてもいいわけなんです。でも、入学試験のときこう書くとバツになることもあるよ。いいね。でも、あとは自由なんです。

○ これ(―を指し)、何。伸ばす。

○ ああ、たいせつにいい、って伸ばすこと。(言い方に笑い声が起こる)それも、面白いな。それでもいいかも分からない。自分の考えを…。

○ 自分の考えを。あなたの考えなら、ここ何ていいたい。大切に…。

○ そおつと、大切にすくう。そうすると、ここ(二連目)は、大切に…。つつむ。

○ 大切につつむ。いい線だね。一応そう考えておく。伸ばすのも面白いけど、川田さんが言ってくれたので、考えてみま

しよう。

○ 「も」の意味分かるね。「も」ということは、前と同じことに使うね。前にあるんだな。

○ さあ、これを大きく二つに分けなさいといったらどこで分ける。

2と3の間。

○ オツケイ。そしたら、ここは何の話。

水の…。

○ 水のことね。じゃあ、こっちは何の話。ここ。

○ ところの話。いいねえ、素晴らしい。

○ そしたら、ここを二に分けるといったら、こう分けられるな。(二区分ずつ)

○ 君達、こういう言葉聞いてない。(起承転結と板書しながら)知らないかな。起承転結といえます。後で、辞書で調べて御覧なさい。

○ どうもこれは、こういう構成になっている。起(指して)っていうのは、話の始め。承は、話の始めを引き継いで、話をがらっと変えて(転を指し)、そして、最後のお話(結)という構成になっている。いいね。

○ じゃあ、この詩の特徴を見ると、ここ(二連)また、二つに分けられるの。どこで分ける。水は…。

○ そう、ここで二つに分けられるな。

- こつちも(二連)も。こう分けられる。
- さあ、そしたら、ここは、「水は つかめません 水は すくうのです」、あつ、この「のです」をやっておかなくちや。どういう意味。普通、どういいう。水はすくいます。
- 「水は すくいます」といいうね。ここは、「水は つつみまます」でいいのに、なぜ、この人は、「のです」にしたのでしようか。
- そうすると、「水は すくうです」では、おかしいね。だから、「の」を入れるんですが、この「の」がどういう役割を果たしているかが、どんな感じを受け取れるかが分かると、この詩がわかる。伝えている感じ。
- そう、伝えている感じ。伝え方がどういいう感じだ。
- あつ、失礼がないように。失礼がないように。
- 優しくいつている感じがする。なるほど。この「の」は、この中の言葉でいえば、これになるの。(板書を指し)大切さを強めている。いいね。そう考える。
- もう一つ、ここもやっておいた方がいいな。「水は」の「は」の働きも考えた方がいい。(本を見せながら)「本が」といったとき、「本は」といったときで

- は、「本は」の方が、本をこうしたくない。(本をみんなに見せるように上げる)なる。
- なるでしょう。そういう取立ての「は」です。こう並べてあるときには。水は…。
- そう、水は、これは、と。(指差しながら)石井君は(間をとって)いい男だ、と、そういうときに、「は」を使う。
- そうすると、ここで一番いいのは何だ。つかめないからどうしたい。
- どういふふうにするのか。優しく。
- そう、大切にすくうんだよ。そこをこのころを目立たせるために工夫しているんですね。
- 普通は、この文章は一つにならない。水は…。
- 水は指を…。
- 水は指をぴたりつけて…。
- そおつとすくうのです。目立たせるために、わざわざ、こう分けている。
- じゃあ、ここ(二連)も同じように考えればいいんだな。そうしたら、(皆で)「水は二つの手の中につつむのです。」「水はそおつと大切につつむのです。」というものでしょう。こう書いたのでは、

- 詩にならない。詩にするために、こう分けて書いてある。ほう。
- そして、この前のこと(一、二連)は、同じでしょう。パターンが。パターンを繰り返すと、私たちの心の中には、そのパターンが続いて、印象として残るか、残らないか。残る。
- 残りやすいでしょう。残っているから、もういわなくてもいいので書いてない。こうして、省略することで、もつと心に残る。そういくことを考えている。そうすると、結論。さっき、言ったように、これをいいたいためにやったんだ、と、いうことが、この形で分かるでしょう。
- 言葉一字で探すと何。も。
- 人のころもの「も」が大事。おまけに、ここは、水のこと、そして、みずのころのこと、そして、人のころのこと、というようになっている。
- 読んで終わりました。暗唱できそうだな。
- 七 よむ
(元氣よく読む。暗唱する)

〈板書事項〉

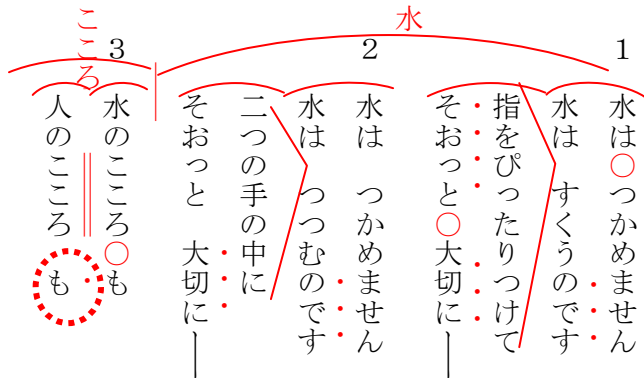
詩と俳句を味わおう

- 1 三連 繰り返し
- 2 文語 七五調
- 3 定型詩 (五・七・五)

季語

水のこころ

高田 敏子



第一次、二次指導混合で (2/2)

- 本時の目標
 - ・ 詩「山のあなた」の文語と七五調を味わい、俳句とともに暗唱できる。
- 一 よむ (音読 三区画 三人)
- 二 とく (復習と本時へつなぐ話し合い)
 - 〈おさらい〉 (前時の六とくのおさらい)
- さっきの復習をしたいと思います。詩は、短いので、表現の工夫をします。その工夫を考えてもらいたいです。一連目、最初は何て書いてあげたか。
 - 水は つかめません。
 - 水はつかめません。(板書)二連目も、一行目は。
 - 水は つかめません。
 - そっくり同じだね。(板書) そういうのを、繰り返しといいます。
 - 一連目と二連目は、ここだけが同じじゃないか。つぎの…。
 - ぞおっと…。
 - ぞおっと、というところも同じだね。(板書) 次の行も「水は」は、同じだね。(板書) 一連目の続きは、すくうのです。
 - すくうのです。(板書) 二連目は、つつむのです。
 - つつむのです。(板書) 両方とも、水をどうしていることなの。大切に…。
 - 大切にしているんでしょう。大切の仕方が少し違うけど、同じように大切にしています。
 - 最初の二行は、同じ形になっています。三連目は、どうなっていたかといううと。
 - 水のこころも
 - 「水のこころ」、「も」(板書)。そして、今度は。
 - 人のこころ も
 - 「人のこころ」、「も」(板書) でした。
 - そうすると、繰り返しをすることによって、私たちの心の中に、響きが出ます。その響きが、最後まで続くようになっていく。その効果をねらっているのね。
 - これ(一、二連)と、同じだよって、どの言葉で分かるの。一、二連と三連は、同じだよって、どの言葉で分かるの。
 - 「も」で分かる。そうすると、ここも、ここも、(三連、一、二行目) どうしなければならないと、書いてないけど、君達の心の中に、自然に何という言葉が出てくるの。
 - ぞおっと…。
 - この言葉(ぞおっと 大切に)が、響いてくるでしょう。詩というのは、こういう工夫して書いています。

○ 題は「水のこころ」だったけど、一番のねらいは、「人のこころ も」ということでしたね。ここを(一、一連)ここだけ変えて、他を同じにすることによって、つながりを工夫している。すこいな、というふうに思いました。

〈承接〉

○ じゃあ、「山のあなた」という詩も、同じように工夫されているんです。山のあなた：(板書) 一行目、「山のあなた」ってあるね。これが、また、何行目に使われていますか。

四行目。

五行目。

○ 五行目。五行目に、また、「山のあなた」と書いてありましたね。(板書) こっちは。

空遠く。

○ 空遠く(板書) となっていて、こっちは。(五行目)

山のあなたになほ遠く。

○ こっちは、「なほ遠く」となっている。(板書) 「なお」と読むけど、文語ですから、仮名遣いが歴史的仮名遣いといってね、こういう使い方をしています。

○ 二行目はどう。二行目と六行目は。いっしょ。

○ あっ、同じだね。(二行目を板書) 「幸すむと人のいう、だけでも、歴史的仮名

遣いだと「ふ」になっているね。こっちも(六行目) 同じようになっているね。そうすると、これ、二行二行をまとめて考えると、この詩はいいんだなってこと、気がつくでしょう。

○ 「山のあなた」の「あなた」は。

かなた。

○ かなた。かなたというのは、山の向こうということ。山の向こうには、どうい

くことがある。

○ 向こうに住むというのだから、誰のこと。

(思案中)

○ 人のことをいつてるんだな。人のことでないのに人のことのようにいうのを何法というの。

○ 勉強してない。これ、擬人法というの。まるで、人のように考える。何を人のように考えているの。

山。

○ 山ではないな。残念だな。住んでいるのは、何だろう。

幸。

○ あっ、幸。幸って何こと。

幸せ。

幸福。

○ あっ、幸せ、幸福ってこと。幸福を人のように考えている。(声を潜めて) 「山

の向こうに幸福があるんだよう。」と、いったけど、うまく「幸」に出会うことができたの。

できなかった。

○ できなかったという詩です。

○ もう一つ。俳句の方を考えます。俳句の方も工夫があるんです。(板書) 閑さ、というの、分かるな。どういうこと。「静か」ってどうこと。分かるね。音は、どうなの。

ない。

○ ない。「音がない」のに、下の方には、何て書いてあるかというの。「音がある」と書いてある。音は、何だ。

蝉の声。

○ 蝉の声というのは、音としたらどういう音だ。蝉の声というの、君らは何を思う。(板書)

うるさい。

○ うるさい。そうすると、これは(板書を指し) 逆のもんだな。逆のことを並べて、こういうのを対比というのだが、比べて書くことによって、「あつ」という発見がある。松尾芭蕉さんは、見つけた。俳句っていうのは、短いから沢山のことにはかけない。「あつ」という一言をここに書いてある。そういうことを考えていきましよう。そこで、季語は何だ。

蝉の声。

○ 蝉の声。蝉というのは、何時だ。
夏。

○ だから、季語は夏。(板書)では、二人目の、虚子の句の季語は、何だな。
遠足。

○ 遠足は、何時の季語になるの。

○ 秋。
残念。

○ 春。

○ あのう、今は、春と秋両方あるけどね。俳句ではね、春の季語にしている。君達は、今でも春の遠足はやっていますか。
(首を傾げる)

○ ない。今は、遠足といわないで(校外学習と担任より助言)、校外学習というふうに変わってきているのね。(遠足でも、足をあまり使わない、バスなので。と、担任の助言)これ、春の季語ね、いいね。

○ ところで、虚子さんというのは、何時ごろの人か、下に書いてあるので調べて。一九〇〇年というから、百年も前に生まれた人なんです。その人が、作った作品だから、この遠足は、バスで行く遠足か。
歩いて…。

○ 歩いていく遠足だ。そう考えておくだよ。山口誓子さんの俳句は、どうですか。季語は、何。
夏。

○ 夏。季語は。
夏草。

○ 夏草が季語だね。(板書)これは、分かりますね。じゃあ、次、秋桜子さんの。
秋。

○ 秋でいいんだけど、これね、冬の季語になっている。落ち葉焚くというのと、冬の季語になってしまふの。十一月に入ってくると、冬の季語になってくるの。(焚き火だ焚き火だ、落ち葉炊き、と担任が歌ってくれる)冬の季語になってくるのね。

○ 最後は、何時だ。

○ 冬、何で。
白葱。

○ あつ、白葱というのがね。葱はこれか
らが美味しくなるの。そうすると、季語がみんな分かっちゃたね。

○ それで、季語は、大事な働きをしている。例えば、葱にもいろいろあつて、白
いところが多いのも、青いところが多い
のもある。細い葱なんか、青いところを
食べるでしょう。白葱というのは、土の
中に深く入れる。それに、太くする。そ
して、何に使うかというのと、鍋物に使う
の。そういうことも、季語の中には、含ま
れると考える。そういうこともイメージ

していくと、俳句は分かりやすい。
(手引き)

○ そういうように季語を考えながら、俳句を写してください。「山のあなた」の方は、二行抜けているところがあるね。そこを、写してください。俳句の作者は、先生がプリントに書いておいたので、写さなくていいです。

三 よむ(指示にしたがつて 黙読)

四 かく(指示にしたがつて 視写)

五 よむ(板書を音読 一名)

六 とく(板書活用の話し合い)

(語義・区分)(難語句の解消と区分)

○ 難しい言葉。ここで、難しい言葉ありますか。

○ 尋めゆきて。

○ ああ、尋めゆきて。「尋め」というのは、尋ねるとのこと。尋問の尋です。「ゆきて」は、「いく」ということ。尋ねていくということ。

○ これ(と)分かる。

○ そう、前と同じ平仮名を繰り返すときに、この記号を使うことがある。漢字だと、どういう風に書く。

○ 漢字だところ(々)書くな。同じ言葉
を続けるときには、こういう(く)記
号を見たことない。そういう記号の一つ。
他。「われ」って分かる。

- 自分。
うん、自分。これ、男か女か。
男。
男だな。この詩を見ると、この男は、老人か、あるいは、子供か、青年か。この詩かいうと、どれだろう。
大人。
大人でも、老人でしょうか。
(首を傾げる)
うん。老人でなく、若い人。そう考えるんだよ。「涙さしぐみ」って、どういう意味。
涙ぐむ。
これ、「さし」を抜けばいい。涙ぐむ。そうして、この「さし」を入れると、強める働きがある。おまけにね、これ、七音にするために、「涙ぐむ」では、七音にならない。七音にするためにこれも入れている。そういう工夫もしているんだよ。
「かへりきぬ」は、分かる。「かへり」は、分かるな。「きぬ」は、何だ。
(思案中)
「き」は、「来た」の「き」。「来る」というのを「来ます」というでしょう。「ぬ」は、「た」、「済んだ」ということ。「終わった」ということ。だから、「帰って来た」ということ。そういう「ぬ」です。
こっちは、いいね。こっち。(俳句)
「閑さ」は、いいね。これ(や)なんだ分かる。「や」はね、「切れ字」っていいってね。これで、文章を終わりにするの。そうすると、この文は、こういう風に切れるの。(やの後に)こ(こ(上)とこ(下)二つの話がくっついていてということ。こういうのを切れ字ということ。
ここは、いいかな。あつ、「おくれ」って何だ。「遠足のおくれ」ってどういうこと。
遅れて、遅れている。
遅れている人のこと。そう考える。遅れている。そうするとこの遠足は、バラバラに歩いているのではなくて。まとまっている。
まとまって、一列に並んで、あるいは、二列に並んで歩いているかもしれない。一列が、いいかも分かんないな。一列に歩くというと、道幅はどうだ。
狭い。
狭い。もしかしたら、俳句を作った人が、遠くから、田んぼのあぜ道を、遠足の子供たちが歩いているのを見て、そんな風景を考えてみると、これよく分かる。
つながりしは、分かるな。
つながる。
「し」は、つながったということね。「汽缶車」って、これ分かる。「汽缶車」の「汽」は、何。
この「汽」は、シュツ、シュツ、ポツポツ、蒸気のこと。「缶」は、ええと、ビールの缶のあの「缶」。そうすると、大きな缶の中に蒸気を貯めて動かす、その車。今は、違う字で書きますが、そういうこと。その方が、感じが出ている。
けむりをまとひての「まとひて」って何。
けむりが、周りに…。
着るってこと。体の周りにずうっと、けむりが着いているということ。
「いま刻む」だから。もう、刻んでいるのか。刻む…。
前。
いま、包丁が入るところね。いま、とわざわざ入れてるのは、そういうことね。
この部分(山のあなたの三、四行目)だけを、また、二つに分けてください。真ん中を抜くと二つになる。抜く場所どこでしょうか。
ええと…。
ああ、…。
「ああ」を残して、ここからどこに行く。「ああ、涙さしぐみ、かへりきぬ」でよさそうだな。そうすると、ここ(われひと々尋めゆきて)を括弧でくくれば

いい。そうすると、ここ(括弧の中)は、何した話だ。

行った。

○ すると、こっち(括弧以外)は。

帰ってきた。

○ 帰ってきた話。どういう帰り方。

涙して。

○ こう、(泣く素振り)涙で帰ってきたんだから、この詩を、一言でいうと、どの言葉が代表している。この詩は、悲しい詩だな。どの言葉に、その悲しさが、一番出ている。

涙。

○ あつ、涙。涙さしぐみの涙でもいいけど、もつといい言葉。

幸

○ 幸は、悲しいか。

山のあなたになほ遠く。

○ 悲しい時に出るもんだよ。理由は、あなたのいったこと。理由は、これ(なほ)でいいんですが、悲しい時に出るもんは何ですか。

涙。

○ 涙の他に出来るもの。この中に、涙の他に出来るものあるじゃない。

ブツブツ…。

○ これじゃない。(ああ、を丸で囲む)

ああ。

○ この「ああ」は、何、残念の「ああ」

でしょう。青年が意気揚々と「幸せ」というものを見に、つかみに行こうと出かけたから、「あああつ」って、やっと山を越えて向こうへ行ったら、向こうの人がどういったの。

「なほ遠く」

○ なお遠くだから、向こうだよと、言われて帰ってきたという詩。

○ この俳句(虚子)も二つに分けて。

おくれ走りて。

○ どころが、抜けるの。そうすると、遠足のおくれ…。

○ 「遠足のおくれつながらりし」でしょう。そうすると、ここ(走りて)が抜けるの。

ここが、この俳句の種。

○ ここ(誓子)。

夏草に。

○ 夏草に。

違う、違う。

○ 夏草に、どこにつながる。

来て止まる。

○ 来て止まる。そうすると、ここ(汽缶車の車輪)が、この俳句の面白いところだよ。

○ ここ(秋桜子)は。

落ち葉たく…。

人きたる。

○ おお、人きたる。どういう人が来たかが、目に見える。

○ ここ(杏子)は。刻む。

○ おお、刻む。ここはこうする(のひかりの棒、を括弧)とよく分かる。そうすると、白葱をいま刻む。この白葱がどうだったかが俳句の種。

○ これ(芭蕉)は、さつきやったように、これ(上五)とこれ(下五)は、反対のことをいっているんだな。これが、ものすごいもんだという俳句。芭蕉さんは、この俳句を仕上げるまでに、三回書き直している。

○ 最初は、「山寺の 岩にしみつく 蟬の声」、「山寺の岩にしみつく 蟬の声」。それを直したのが、「さびしさや 岩にしみつく 蟬の声」「さびしさや 岩にしみつく 蟬の声」。最後は「閑さや 岩にしみつく 蟬の声」。これが、一番いいでしょう。それでは、このくらいにして。

○ ここ(虚子)。遠足の行く様子を眺めて、誰かが気がついて、ワイワイしながら走っている面白い雰囲気が出ているでしょう。絵が見えるでしょう。

ええ。

○ 君達も、あるでしょう。歩いているうちに遅れてきて、誰かが走り始めると、みんなワツと走っていくでしょう。それを、かわいらしいなあと思って、見ている。そうすると、この遠足の様子、学年

が大きい方が面白いだろうか、小さい方が面白いだろうか。

小さいほう。

○ 中学生より、小学校の一年生の遠足を
見ていると考えた方が面白いでしょう。

○ さあ、ここ。「来て止まる」、草に来て
止まるのは何だ。普通は。
虫。

○ それも、何が止まったの。車輪が止ま
ったように見えるんだな。ということは、
どこから見えていたんだろうか。

原っぱの。

○ 原っぱの上か、下か。

○ 下から眺めているんだな。車輪がちよ
うどうまい具合に、虫が止まったように
感じたの。そういう一瞬を捉えたの。そ
う考えると面白いね。

○ さあ、ここ。人、どんな人が来たの。
けむりをまとった。

○ そうすると、その人のこと、近づいて
いて来るまで、分かるの、分からないの。
分からない。

○ 誰だか分からない。そうすると、これ
は、昼間だろうか、朝だろうか、夕方だ
ろうか、それが、イメージとして合う。

夕方。

○ 夕方がいいね。朝早くもいいかもしれ
ない。夕方。そうすると、焚き火をして
も威勢よく燃えないんだな。煙がボーッ

と広がって、辺りが煙っている中からぬ
っと現れる。ぬっと現れると、そう考え
るといいでしょう。

○ さあ、ここ。葱を刻むだと面白くない
ね。葱が何になっっているの。

光の棒。

○ 光の棒。光の棒になったというのだけ
ら、その葱の色は、一番上の皮を剥いて、
真っ白になったの。葱の太さはどうなの
かい。

○ そのイメージがうまく表されている。
この葱は、買ってきて何日も経っている
のか。あるいは、畑から採ってきたばっ
かりの葱か。

○ 畑から採ってきたばかり。
採ってきたばかり、それをサツと剥
いて。そういう俳句を作れる人は、どう
いう人。

畑をする人。
料理をする人。
料理をする人。もっと身近に。
お母さん。

○ お母さん。この人は女の人。他の人は、
「子」と書いてあるけれども、男の人。
しかもね。

七
よむ

〈板書事項〉

1 水は つー 水は つー 水のこころ
水は すー 水は つー 人のこころ

山のあなたの空遠く

「幸」住むと人のいふ。

ああ(われひと)尋めゆきて、(々)

涙さしぐみ、かへりきぬ。

山・
「幸」・
なほ

閑さや(岩)にしみいる(蝉)の(声)

(遠)足のおくれ(走)りて(つ)なが(り)し

夏(草)に(汽)缶(車)の(車)輪(来)て(止)まる

(落)ち(葉)たく(け)む(り)ま(と)ひ(て)人(き)た(る)

白(葱)の(ひ)かりの(棒)を(い)ま(刻)む